

〈ふるさとの食卓〉

みんな「食べて」大きくなった

184

土地から生まれた地元食。地域に百の家庭があれば百の食があり、私たちは何を食べて大きくなったのでしょうか。ブランド化した食ではなく、土地から生まれた食材に育てられた子ども頃のふるさとの食卓の思い出を添えて家庭のレシピを紹介します。

しばまき

ツバキの葉巻

かつて、熊野には女性たちに愛された独特のたばこがあった。

熊野灘に面した地域から熊野川や古座川、日置川をさかのぼった山間地域を中心に、女性たちが愛煙したツバキの葉巻である。ツバキの葉をラップ状に巻き刻みを詰めて吸う、柴巻と呼ばれた。

これらの地域で聞くと、終戦前後に生まれた「孫」世代から「柴巻たばこを吸っていたおばあちゃん」の思い出話が多く出た。「祖母」らはほぼ明治生まれ。その時点で生存者はいなく、「孫」の母世代では柴巻習俗は姿を消していた。

おばあさんらはツバキの葉を巻きながら話し合いをしていた。焚き物を背負っていても、田畑仕事の間でもしよっちゅう吸っていた(旧大塔村鮎川)。

ツバキの葉巻は香味よくおいしーと言



ついていた(旧大塔村木守)。祖母がしよっちゅう口にくわえていた。近所の漁師のおばあさんらも吸っていた(串本町串本、檜野)。祖母が吸っていた(すさみ町権平)。刻みの「みのり」を巻いて吸っていた(古座川町平井)。地区の人は年中吸っていた。刻みは「ひびき」や「いこい」。中学生時代こそ吸

つたがタールがきつかった(那智勝浦町二河)。ツバキの葉を集めておばあさんに売って小遣い稼いだ(古座川町高池)。祖母が吸っていた。吸う時のツバキがじりじり焼ける音が印象的だった(熊野川町九重)。大叔母が店番をしながら吸っていた。亡くなる直前まで吸った(本宮町武住)。祖母はくど(かまど)で薪をくべながら吸っていた(本宮町皆地)。本宮町下湯川)。同級生の母親が年中吸っていた。吸い終わると残りの粉を手のひらに受けてなめていた。長生きされた(本宮町静川)。祖母はいつも口にくわえ、吸い口に残った溜まりを葉ごとバリバリ食べていた(本宮町野竹)。聞き取りの一部だが、子どもの目で見た女性らの姿だ。みのり、ひびき、いこいは昭和の初中期に発売された刻みたばこで、配給制になるとヨモギやフキの葉を乾燥させ混ぜても使った。本宮地域ではカシの葉で巻き、これも香りがよかった。江戸末期の文人らの紀行文や南方熊楠の随筆には、柴巻をくわえ頭に薪や

行李を戴き険しい山間の路を通う女性の姿が書かれていた。頭上で林産物などを運ぶ「いただき」は熊野の女性の習俗だった。



熊野の女性は、荷運びで険しい峠を往復し、田畑仕事、牛の世話、薪とり、養蚕など休む間のない厳しい労働の日々であった。柴巻は、ずっと口の端で噛んだまま吸うため、細かい手仕事や力仕事に休む間もない女性には都合がよかった。年中口にくわえタールの溜まりまですすったこのことから、女性たちの強い嗜好と依存性が想像できる。地域に生える豊かな葉を使った一服の愉しみで、厳しい暮らしの日々を乗り越えてきたのだろう。

湯崎真梨子(ゆざき・まりこ)

和歌山大学 食農総合研究教育センター 客員教授

博士(学術)。大阪府立大学大学院人間文化学 研究科博士後期課程終了。元和歌山大学教授。専門は農村社会学、地域再生学。内発的發展、食料経済、地域資源、地産地消、低炭素化社会などがテーマ。自らの研究に加え、地域と協働するプロジェクト研究もマネジメントしている。熊野方面には年間30〜50日は訪問し研究する。



ツバキの葉巻(しばまき)

熊野の女性の嗜好品

肉厚のツバキ葉に巻いたたばこ

【材料】

▽自生する大きめツバキの葉▽カシの葉▽刻みたばこ

【作り方】

- ① 吸う直前に葉をあぶり軟らかくして使う。
- ② 葉のつるつるした面を内側に、刻みを入れ、ロート状に巻く。
- ③ 口の端の歯に挟み吸う。



刻みを入れロート状に巻く



カシの葉



ツバキの葉



地域に自生するツバキの木

■今回は4月22日土付掲載予定